

和洋女子大 ○田口 秀子  
永井 照枝

1. 演者らは、天然繊維をも含めて化学繊維を直接肌につけた場合、皮膚表面温度がいかなる影響を蒙るかを追究した。供試布はコットン、ウール、アセテート、カシミロン、テビロンおよびベンベルグの6種で、これらの布により皮膚露出面積の異なる衣服を作成し、一定時間着用による布地別、部位別およびデザイン別の各面より着用時の皮膚表面温度の分布を日立製作所製の電子管式記録計（6点式）2台を用いて、皮膚温の同時測定を行なった。測定部位は胸骨上部、胸部、腹部、左肩中央、左上腕中央前部、左上腕中央後部、左前腕中央前部、左前腕中央後部、第1胸椎、第8胸椎および第1腰椎の12カ所で、実験環境は、温度 $23 \pm 1.2^{\circ}\text{C}$ 、湿度 $75 \pm 4.7\%$ である。結果の大要は次に示す通りである。1) カシミロン、テビロン、ベンベルグおよびウールでは、コットンおよびアセテートに比し、高温を示し、その温度分布は相酷似している。2) 皮膚温の高い順位を示すとテビロン>ベンベルグ>ウール>カシミロン>アセテート>コットンの順である。3) 特に興味をもたれたのは、上腕部および前腕部では、他の部位に比し、低温（ $27 \sim 32^{\circ}\text{C}$ ）を示し、これらはデザインに関係なく同じ結果を示した。4) 胸部、腹部、第8胸椎、第1腰椎では

各材料布とも、他部位に比し高温 ( $30\sim 34^{\circ}\text{C}$ ) 傾向を示した。5) デザイン別にみると、裸体時より袖なし<半袖<長袖の順に皮膚温の高くなる傾向を示した。